



traverse 二十周年記念座談会

traverse 20th Anniversary Discussion

『traverse—新建築学研究』編集委員

布野修司

Shuji FUNO

古阪秀三

Syuzo FURUSAKA

竹山 聖

Kiyoshi Sey TAKEYAMA

石田泰一郎

Taichiro ISHIDA

大崎 純

Makoto OHSAKI

『traverse—新建築学研究』創刊二十周年を記念して、創刊当時の編集委員の先生方を招き座談会を行った。『traverse』に込められた思いを振り返りながら、その本質と展望について議論する。

聞き手：宮原陸、菅野拓巳、三浦健、河合容子

2018.8.23 京都大学桂キャンパス竹山研究室にて

創刊にあたって

布野 — まだ大先生方が助教授だった時代に、助教授のJをとってJリーグといって、何か月かにいっぺん集まって、鴨川縁の赤垣屋でいろいろな議論というか飲み会をやっていました。そのなかで、研究というと黄表紙（日本建築学会の論文の通称）だけを意識しているような仕事ばかりをやっていたらだめじゃないのか、京大は京大の審査基準を持って、京都からなにか発信できないか、という話になったんだと思います。僕は東京から来たこともあって、京都大学に憧れがあった。京大のオリジナリティとし、かつて『建築学研究』¹⁾があったわけですし、京大としての独自のメディアをだしたらたらどうかと思ったんです。

古阪 — 設計、構造、設備とかマネジメント系とか、いろいろな分野がとにかく自由にやろうというのが、いちばん大きなことなんですよ。

布野 — そうそう、竹山先生が付けた「traverse」という名前にもその思いが込められている、学際的に議論をやろうというね。建築のなかでも分野を超えて一緒にやりましょうという意識があった。

竹山 — 『traverse』を作ったときは純粋に、京大発のメディアを作ろうよ、論文報告集のような形ではない、京都でもっとフリーに皆で語れる場を作ろうよと。『建築学研究』という戦前から戦後にかけて京大で出ているものもある程度そういう自由な気風がありました。僕は東大の大学院のときに、イェール大学の『Perspecta』という雑誌に原稿を書いたことがあるんですね。これはすごく立派な雑誌で、大学院生が企画・編集して、執筆を世界中から集めるということをしていて。ハーバード大学も『Harvard Architecture Review』というのを出している。そういうのを見ていると、どちらも大学院生が編集長になって雑誌を出していて、その編集長はたいへんすごいクリティークになっているか建築家になっているんですよ。僕はそういうふうな雑誌にな

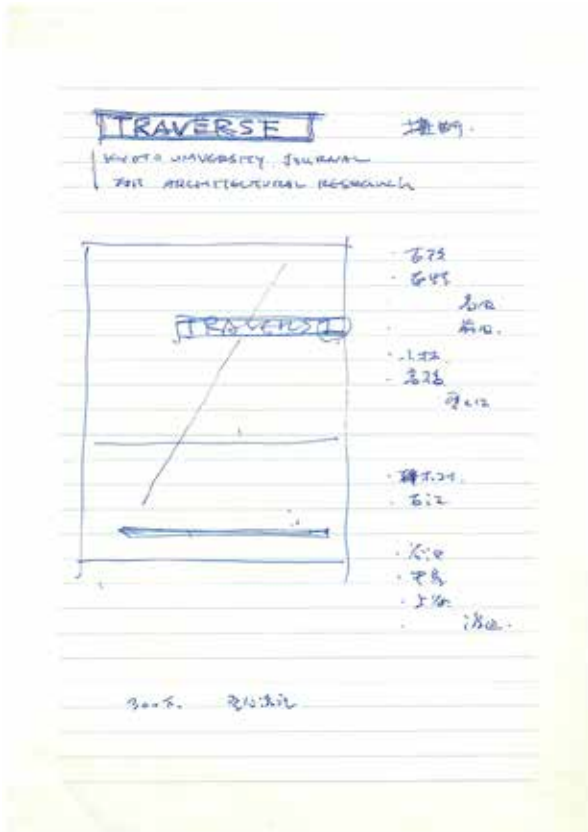


れば、京都大学の機関紙になればいいなど。最初から学生が中心になるといいかなと思ったんですけど、スタートするときいきなりはちょっと無理なので、われわれで道筋を引いて、いずれはそういう方向になればいいと思っていました。

大崎 — 最初は海外に向けてという意味合いがだいぶ大きくて、それで半分英語にしたり、英語のアブストラクトを必ず書いたりしました。

石田 — 布野先生の巻頭言を何回か読んだことがあります。僕の理解では、京大のそれぞれの先生がレベルの高いことをいろいろとやっているけど、どうもよくわからない。だから京大の活動を外部に向けて発信しようと。そうして外部に対してだけでなく内部に対しても相互に見えるような、どこから見ても京大の活動がくっきり見える形にしようというのが、創刊のとき皆で考えたことにあったと思いますね。後は自由なメディアというか、論文に書くようなことではないかもしれないし、かといって商業的な話でもない、自分の専門に関することを書けるメディアになればいいなという話もありました。もちろん京大のなかでも、もう少し自由にやりましょうよという話もありました。それから、先ほど話にあったような飲み会の議論もあって、創刊したという話だったと思います。当時は、ある外部の先生から「この時代によくこういうことをしますね」と言われたりしたけど、僕たちはこういう事をやるんだぞという自負心みたいなものもちょっとありました。

1) 『建築学研究』:1927（昭和2）年5月に創刊後、1950（昭和25）年156号まで発行され、数々の論考が掲載された。



traverse 創刊時のスケッチ

思い出に残っている記事

名誉教授インタビュー²⁾

—— 布野・古阪・大崎

竹山 — 名誉教授インタビューというのは僕の記憶では、いちばん最初からシリーズで目玉企画の一つとしてありました。第一号は横尾先生。とにかく名誉教授に聞いていこうと。

大崎 — 『traverse』創刊にあたって、過去の「建築学研究」の記事を全部見たんです。その頃は出版物が少なかったのでもここに論文みたいなものを書いていたんですね。これが京大の学術的な媒体でした。これに見習って、学術的な発信の場として『traverse』をつくりましょうということになって、最初はそのような先生方の論文に近いものを出したわけです。

布野 — 今の学生にとっても、竹山先生がどうやって何を作って何を書いてきたかっていうことは気になるでしょう。まず『建築学研究』の頃を知っている先生方に聞きたかった。実際に教えて来られた先生に聞くというのは自然な流れだったし、初心を確認すべきということだよ。

大崎 — 戦前の頃に学生だった横尾先生は、戦前戦後の「建築学研究」の状況を知っておられたので、そういう話を聞くということもありました。そうして当然のごとく、最初の名誉教授のインタビューは横尾先生に決まったわけです。横尾先生は、縦社会の横働きということや、横のつながりが大切さというのをずっと言われていて、『traverse』という言葉を見てすごく喜んでおられました。構造の先生で計画系と話ができる先生というのは昔は横尾先生だけだったのですが、今はたぶん私だけだと思うんですよ(笑)。そういうことも引き継いでいる。

竹山 — やっぱり名誉教授になると自由になるから、なんでもしゃべってくれます。それに布野先生もおっしゃったけど、計画系でも歴史をちゃんと見るのが大切だと思っていて。だから、歴史を改めて振り返ってみるという企画もあっていいだろうというので、何人かに連続して名誉教授インタビューをしたんですね。

布野 — 本当におもしろかったよ。



1号に寄せた記事³⁾

— 石田

石田 — 思い出の記事を挙げてくださいといわれて、『traverse』1号で20年前の自分が、最初にどんなことを書いたのかなと思って読み返してみました。すると、こういう課題についてこういう考え方で研究したいということを、割と思入れを持って書いていました。それで、今でもこういうことを考えているな、おおよそ問題意識としては同じことで、20年前からこんなことやってたな、と改めて感じました。20年経って、いくつかの問いについては、ある程度答えられるようになっていますが、依然として大きな問題については僕自身まだ答えを持っていないし、クリアにもなっていない。こういう記事は他のメディアだったら書かないだろうし、そういうものが書けたのは『traverse』だからかなと思いましたね。

竹山 — 『traverse』が7年越しの出版だったというのがあったんですけど、たぶん93年に立て続けに僕も含めて外から呼ばれてやってきて、京大の中でいろいろな力学的な作用があって、いろいろな地殻変動が起きたんだと思いますね。それで新しく入った人間、それから元々いて新しいことに動こうとしている人たちが、わーっとマグマが吹き出すように亀裂を登って行って、ボンって吹きあがったのが1号。7年ゼミみたいにね(笑)。こういうスタイルのメディアは日本の他の大学にはなかった。こんなものができたのはすごいことだと思っていますね。

大崎 — 学生と教員が両方書いているというのはあんまりないかなと思いますね。

竹山 — 問い直す企画として、大学とはなんだ、というシリーズもあったわけですね。とにかく、教育とは、大学とは、建築学とは、とか。そこで、建築学とは、ということで「建築学のすすめ」⁴⁾にやがてなるんですけど。



布野 — これはすごく時間がかかったよ。皆が本音でこういうことを考えて教員をしましたよ、ということを書いたから。

若手座談会⁵⁾

— 竹山

竹山 — 布野先生が僕の半年前に京大に来ていて、僕が来たときに布野先生に言われたことがあるんですよ。「京大で建築家を育てるぞ」って。底辺を上げたり、アベレージを作ったりするのではなくて、トップを引き上げるんだと発破をかけられたんですよ。

布野 — しんどいんですよ、ボトムアップというのは。

竹山 — つまり、そういうふうに建築家を育てなきゃという話があって、十何年経ったときに、気がついたらSDレビューという若手の登竜門のようなコンクールに京大の学生が通るようになったんですね。9号のときには、卒業設計日本一を三連覇した。そういうふうなことがあったので、京大出身の若手の建築家、これから伸びる人たちを集めて我々で話を聞こうという企画が立ち上がりました。どういう記事にしようかというなかで、とりあえずSDレビューに通っている若手を集めてみようかということでそんな企画になりました。これがとっても面白くてね、やっぱりその後皆活躍しています。僕が最初来たときに布野先生に宿

題を言われて、それからしばらく経って京大からも結構元気な若手が出てきて、その気分がここに表れているんじゃないかな。新しい先生が来たら、わーっと学生が刺激を受けるじゃない。布野先生が来てその半年後に僕が来て、そのときの2回生・3回生というのは、いわば紀元前と紀元後くらい違うわけ。

布野 — 僕は9月に来て、最初に2回生の課題で「鴨川フォーリー」というのを出したんだけど、そのときの2回生が皆頑張ってるよね。平田晃久、森田一弥、山本麻子などアトリエ事務所をやっているのは学年80名中かなりの人数ですよ。次の年から竹山先生が来て、設計教育を見直したんです。それまでの設計演習は実は4年生まで同じ先生が担当していて、一人でレポートの採点をするがごとく、なんの議論もされていなかったという状況があった。僕は設計の経験は少ないけど、山本理顕さんや毛綱毅曠さんと設計教育してきた経験はあったから、積極的にやったほうがいいと思った。

竹山 — それよりももっと大きいのは締切を守らせること。信じられないだろうけど、その頃までは締切を守った学生はとにかく一人もいなかったんです。締切を守る学生がいないということは、講評会ができないということ。僕はそれを知っていたのだけど、布野先生は東大出身で、締切守らないなんて信じられないわけですよ。

布野 — 講評会を全員についてやって、ビアパーティ。芦原義信先生が始めたんだけど。翌日に次の課題が出る。それが当然だと思っていた。

竹山 — 京大は、締切の日にぼちぼち始めようかという学生が多かったわけですよ。先生達もそれに対応して学年末に辻褄があっていればいいと。実は、締切を守りますよとって、布野先生とか僕とかが設計演習を始めたときの最大の抵抗勢力は先生達だった。そんなことはできないっていうんですよ(笑)。学生は締切を守れといたら、それまでを知らないですから、そういうもんだとすぐにそれに順応するわけですよ。先生達がいちばん大変だった。



座談会 快感進化論書評⁶⁾ — 学生

布野 — 「快感進化論」はおもしろかったですね。

竹山 — シンプルだと思いますね。伊勢先生⁷⁾は、お酒も飲まないしストイックな感じがあるんですけど、おもしろいユニークな発想をされていて。そのユニークななかでもユニークなものがこの「快感進化論」です。伊勢先生は、栗本慎一郎という文化人類学者・経済人類学者を特に私淑していて、その人とすごく親しいですし、すごく影響を受けていますよね。伊勢先生は環境の、特に音の先生なんですけど、ものすごい文化論的な発想をされていて、学術的には怪しいというふうな理論がいっぱい出てくるわけですけど、その分すごくおもしろいわけですね。そのころ、複雑系とか、それまであらゆる分析のなかで出たものを総合的に理解しなおそうじゃないかとか、非合理的なものに論理を認めるにはどうすればいいかとか、そういうようなことを考えて伊勢先生が出した本が「快感進化論」です。それがおもしろいというので皆で座談会をしたんですよ。

布野 — 伊勢さんの議論で僕がいちばん覚えているのは、要するに言語と空間認識力がホモサピエンスの原理だということですね。音というのは、栗本慎一郎の理論がバックにあるんだろうけど、突きつめていくと言語の話になると

いうわけですね。言語の起源はというと、目の前のマンモスを捕まえるときに、声を発してコミュニケーションをとっていたことに始まる。二足歩行とか、道具や火の使用とかあるけど、ホモサピエンスがホモサピエンスとなるのは空間認識能力なんだよね。言語も抽象能力ですね。空間を認識する抽象能力を持ったのがホモサピエンス、建築をつくる能力が人類の根拠。「誰もが建築家である」というのが布野説。

竹山 — 僕は座談会で、火と言語、に建築も加えるという発言をしていて。火と言語と建築が、人類が認知的贅沢を十分に楽しむための装置であって、それによって進化したと。ここで布野先生と僕は微妙な戦いをしてますね。でもね、今の布野先生の話はまったく腑に落ちて、言語と空間認知というのは人間のある種のコミュニケーションをきちんと整えたわけですよ。言語には二つあって、他者とのコミュニケーションとインナースピーチ、自分の内部の思考の深まりでしょ。この二つはどちらが先かという議論があるんだけど、でも少なくとも社会をつくるときには、他者とコミュニケーションをとるといって、ある場をつくる力が言語にはある。それで建築にも、ある場をつくるという力がある。火にもその力があって、火のまわりに集まって、ダンスとか言語を通してコミュニケーションをとる。その場をちゃんと安定的につくるのが建築。だから火と言語と建築というのはとても重要なんじゃないかということ話をしました。

布野 — 例えばミツバチでもチンパンジーでも巣を作る。遺伝子に組み込まれている能力と後天的に建築能力を獲得していった空間、言語の抽象能力とは異なる。我々は家だけじゃなく風よけの塀でもなんでもつくる。建築を我々は獲得したということ。

石田 — 人工環境ですよ。それと人の身体的な深いところにあるもの。それらの関係がどうなっているのか、というところが今の建築・都市の大きな問題じゃないかな。技術的にいろいろなことができるようになって、光だけ考えてもそうなんですけど、人の光に対するいろいろな感じ方

や生理的な反応を見ていくと、やはり自然の光に適応した結果が人の心身には刻み込まれているなど感じることはあります。

布野 — ということは、人工環境だけで育った新しい人種ができるという話ですね。自然環境だって森を切ったりしたら相当違うわけでしょう。環境も違ってきたら人種も違ってくる。

石田 — そこまで変わるのかという話もあります。これからの『traverse』で、例えばそういったテーマでの企画があってもいいと思いますね。

布野 — 単に大飽みたいテーマじゃなくてね。

2) 布野修司・古坂秀三・大崎純, 真のトラバースを 横尾義貴 名誉教授インタビュー, traverse 1, pp.129-135

以後 traverse 2, 3, 5, 7, 8, 9, 10 に掲載

3) 石田泰一郎, 色彩の心理効果の意味を考える — 人と環境の長く深い付き合い, traverse 1, pp.87-93

4) 平田晃久・松岡聡・百田有希・大西麻貴, 京都大学 出身 若手建築家 座談会「これからの建築ジェネレーション」高松伸+布野修司+竹山聖, traverse 9, pp.21-36

5) traverse 編集委員会 編 (布野修司・古坂秀三・山岸常人・竹山聖・大崎純), 『建築学のすすめ』, 昭和堂, 2015 年

6) 座談会 快感進化論書評, traverse 5, pp.85-99

7) 伊勢史郎: 2003 年京都大学工学部准教授。著作「快感進化論 ヒトは音場で進化する」

『traverse』の可能性について

石田 — 巻頭の辞にある、京都大学の活動がくっきりと見えるようにということがトラバースの創刊の志です。だけど最近のトラバースの記事で学生編集の皆さんが時間を使って力を入れているのは、インタビューとか外部の人の話を聞くことですね。それは確かに京大の人がやっているけども、京大の発信とか京大の姿がくっきり見えるということとは、また違うんじゃないかと僕は思っています。そのような企画があってもいいし、そのような方向に変わっていくならそれでもいいかもしれませんが、それはトラバースの初めの頃の考え方とは変わったところだなと僕は思います。

竹山 — それは僕も同感してる場所がある。タモリがやっていたテレフォンショッキング、あれと同じで前巻のインタビューが次を紹介するやり方をしていったら、どんどんかけ離れていったわけですよ。それはともかくルールをそういうふうにしてしまったから、結果的に、遠くまで取材に行ったりスカイプでやったり、いろいろなことをやるようになって。もうちょっと近場の、地に足ついた方向にした方がいいんじゃないのということになって、また京都に戻ってきているのですよね。

布野 — OB もいっぱい出てきているんじゃないの。京大ナショナリズムじゃないけど。



先生方から一言

布野 — 『traverse』にはいろいろな性格がある。それで願わくは、ぬえ的であることがいい。ある側面は既往のだけど、ある側面は学生が勝手にやっているふうだし。あまり他から規定されないこと。そして二番目に言いたいのは、どうやってサステイナブルにできるかということ。

古阪 — 出発点は、自由。この建築学科のなかでもそうだし、外向けにも自由にやっている。それがいちばん重要だと思う。京大はもともと自由だといっていたにも関わらず、だんだんとそうじゃなくなった。そういうなかでそのことをわれわれは発信しないといけなわけね。メディアは大いに自由にできる可能性がある。もうちょっと変なことをいうと、日本はステップバイステップで、石橋をたたいても渡らないくらい慎重になる。一方で中国はスキップバイスキップ。なにが良くてなにがまずいか。制度的にはスキップしないといけなようなものがいまだに残っている。この『traverse』はそこでどういうふうに自由な発言をするか、非常に難しいことですが、是非ともそういうことを、自信を持ってやってもらいたい。

大崎 — 『traverse』の位置づけというのは、創刊のときからあいまいで、京大建築の有志とでやっているもので公式のものではないんですね。建築系教室にあることは明記していて、その住所はここ京都大学の住所が書いてあります。だからあまりいいかげんなことはできない。それから、最初は海外に向けてという話で、英語をもうちょっと充実させて海外の方にも見れるようにした方がいい気がします。

石田 — 僕は、『traverse』の創刊の精神というのはどこかにあったほうがいいと思います。でも、さっき布野先生が言われたように、ぬえ的なところがあるというのはおもしろいと思います。どこから見てもくっきり見えるのかどうかかわからないけども、見る角度によって見え方が違うみたい。

竹山 — 今日過去の記事を見て、すごくいいことが載っているなと思って(笑)。僕こんな発言してるんだという。記録としても中身としても、とっても意義のあるメディアじゃないかと。ただ僕はやはり、学生がのびのび育つというか、どれだけ刺激を受けて新しい経験を持つかということが大切で、『traverse』のメディアとしての充実度もそうですけど、同時に学生たちも人生を前向きに生きてくれるきっかけになってくれればいいなと思っているので。そういうような媒体にはなってきたんじゃないかと思うんですよ。今後に伝えていく限りは、これは不滅ですという感じがします。そして意義があると思います。

